金沢市まちづくり市民シンポジウムの開催概要について

１．シンポジウムの開催概要

●タイトル：人口減少時代を乗り越える都市ビジョン ―金沢型集約都市を考える―

●日時：平成 29 年１月 28 日（土）13：30～16：50

●場所：金沢ニューグランドホテル４Ｆ

●参加人数：185 人（定員 150 人）

●内容：１）基調講演「人口減少時代における成熟都市とは ーまち育てのススメー」
講師　弘前大学教授　北原 啓司氏

２）報　　告「金沢市集約都市形成計画（案）」
金沢市都市計画課長　淵 吉忠

３）パネルディスカッション「金沢型集約都市の実現には!?」
コーディネーター　金沢大学名誉教授　川上 光彦氏
コメンテーター　弘前大学教授　北原 啓司氏
パネリスト　金沢工業大学教授　谷 明彦氏
一般社団法人金沢経済同友会理事　半田 隆彦氏
金沢大学准教授　西野 辰哉氏

〈市長挨拶〉

〈北原教授による基調講演〉

〈金沢市報告〉

〈パネルディスカッション〉

２．基調講演の要旨（弘前大学教授　北原 啓司氏）

・コンパクトシティは都市の縮小などの都市形態だけを意味するものではなく、都市の充実を図り豊かな暮らしを実現する、自動車に依存しすぎないまちをつくるといった、持続的な成長を実現するための政策である。

・これまでの成長社会は、量的不足への対応として、グローバルの名のもとにスピード重視のアメリカモデルで大量の空間を提案してきた。しかし、今後は質的な変化への対応として、ローカルを重視したヨーロッパモデルにより、地域で味わう物語を提案していく必要がある。その具体化には、通りを歩く目線を大事にするエリアマネジメントの発想が重要である。

・成熟社会にとって必要な視点としては、次代に向けて地域の人材を育てることにあり、それは「空間」に人々の想いと活き活きとした行為を加え「場所」に変える「まち育て」のプロを増やすことにある。こういった取り組みはアメリカの「メインストリートプログラム」が代表的な事例であり、地域をマネジメントする人材を育てることが、ひいては地域を育てることにつながる。

・「私」の空間を「公」に提供し「私」である住民が公共性を育てていく黒石市「小見世（こみせ）」の事例や、街なかに自宅でも職場でもない「第３の場」をつくることで街なかの再生に取り組む事例など、まちの担い手を巻き込み、育て、地域で「場所」を生み出していくことが今後のまちづくりには重要である。

・真のコンパクトシティ政策における「まち育て」は、これまでの“集約する、たたむ、つくる”から“活かす、使い倒す、育てる”への発想の転換が必要であり、これはＦＭ（ファシリティマネジメント）につながる考え方である。

・立地適正化計画は「第２の線引き」ではなく、各誘導区域を自治体がどのような区域として考えるか宣言する計画である。そのため、その地域に住む市民に現実を正確に伝え、市民と向き合い、一緒に計画を進める覚悟を持つことが重要である。

３．パネルディスカッションの要旨

（１）パネリスト・コメンテーター・コーディネーターの意見等

●谷明彦氏（金沢工業大学教授：パネリスト）

・一般市民の方が分かるように、コンパクトシティや持続可能な都市の実現により、市民生活にどんな良いことが生じるのか具体的に示す必要がある。

・そのためには住民自らの手でまちづくり活動を行い、小さな成功例を広げていく活動が重要である。

・郊外の大規模商業施設の立地の抑制に向け、広域的な連携による取り組みが必要である。また、地域経済の視点を踏まえた検討も必要であろう。

・都市の防災・減災対策として、これまでのような各災害に個別に対応するのではなく、総合的な視点で地域と一体となって取り組む必要がある。また、災害が起きてからでは遅いため、今後の気候変動等を踏まえた対策を検討してく必要がある。

・自動車依存社会からの転換には、具体的な家計負担等も含めた経済性を含めた論議が

必要ではないか。また、その際には自転車が有効な手段の一つと考えられる。

●半田隆彦氏（一般社団法人金沢経済同友会理事：パネリスト）

・金沢には都市生活を楽しむ魅力があり、その魅力を活かしたまちづくりが重要である。その中で、ナイトライフの充実も一つのポイントになると考えられる。

・中心部には多様な魅力があるが、その他の幹線道路沿線などでは既に市街地が形成されており、実効性のある誘導をどのように行うか検討が必要である。

・校下や町会などの地域コミュニティを活かし、行政や大資本をあてにするのではなく、地域として担うべき公共的な役割を、行政がコーディネートすることが重要である。

・団塊の世代が 75 歳以上になり社会保障費等が増大する 2025 年問題に対しては、コミュニティ単位での取り組みが重要である。

●西野辰哉氏（金沢大学准教授：パネリスト）

・今後の社会情勢を考えると、短中期的には高齢化対策、中長期的には人口減少対策といった２つの側面を踏まえた計画にする必要がある。

・高齢化対策の視点では、高齢者が自ら移動しなければいけない病院へのアクセシビリティの確保が重要である。また、施設に入居した際に、それまで住んでいた住宅が空き家化する可能性が高いが、特に相続発生時の対応が重要となるであろう。

・金沢は都市構造そのものが歴史であり、その資産を活かしたまちづくりが重要である。

・持続的なまちづくりを今後も続けていくために、次世代を担う若い人を育てていくことが重要である。

●北原啓司氏（弘前大学教授：コメンテーター）

・これまでの都市計画はスピードや効率が重視されてきたが、これからは歩く人や自転車を使う人などの視点で、まちなかに楽しめる選択肢を作り、やりたいと思った人ができるまち、“あずましい（快適で心地よい）”まちが重要である。

・これまでは土地を持つことを是としたまちづくりをしてきたため、地価の安い郊外に住宅地を作ってきたが、今後は土地の所有に拘らず、定期借地等の賃貸も含め、安心して暮らせるための土地の使い方やまちづくりを考えていく必要がある。

・都市計画では市街地のみを対象とすることがあるが、まちは第１次産業を含めて成り立っているため、しっかりと意見を踏まえたまちづくりが重要である。

・一般居住区域については、状況を正確に伝えたうえで、住みたいと思う市民と向き合い検討していく区域であり、行政は覚悟を決めて取り組む必要がある。

・まちは研究の材料にもなるし、プレゼンの材料にもなるし、学生がいきいきと活動できる場所にもなるため、学生もまちづくりの担い手として十分に活躍できる。

・人口減少を楽しみ、ビジネスチャンスに変えていくような発想が必要である。

●川上光彦氏（金沢大学名誉教授：コーディネーター）

・これまでに整備された様々な基盤や歴史的な資産を活かし、市民が参加しながら、タウンライフを楽しめるまちづくりが必要である。

・今後の金沢の都市像の骨格や方向性を示した計画であることから、市民に分かりやすくなるよう、今後も見直しながら、みんなで考えて行動していくことが重要である。

・都市計画だけでは実現できないため、関係機関を含め市全体で取り組む必要がある。

（２）会場の意見等

●長期的な視点を持った計画であるため、気候変動による災害の激甚化が叫ばれており、都市計画においても考慮すべきである。特に、都市機能誘導区域に指定される地域は災害の危険性が高いと考えられる。また、金沢の消費を支えているのは農林漁業であり、産業の視点を含めた計画とすべきである。

●今後は人口減少が課題となり、その対応のために都市のダイエットは重要だと思う。そのため、一般居住区域に住む人は、40、50 年先にはまちなかや居住誘導区域に移住する政策がとられるのか心配である。また、公共施設の再編などにより、生活が不便になることなどが不安である。

●介護分野では地域包括ケアに関する取り組みが開始されるが、金沢市は地域コミュニティの活動が非常によい点が特徴である。コンパクトシティの概念は縮小ではなく、重点的な地域を定め、様々な取り組みを展開するという考え方とのことであり、人口減少や高齢化が進む中で、高齢者が社会参加し、どのように楽しんでいくかということを考えることが重要である。楽しい仕組みをいろいろと教えていただいたため、お年寄りにも教えて楽しくしていきたい。